



## はじめに：コンテスト参加のきっかけ

「1分間の中には数えきれないほどのドラマがあった」。私がこの度、中学2年生の生徒達と共にOne Minute Videoコンテストに参加させて頂きました。最も強く感じた事です。この場をお借りして、映像制作の過程と、生徒達のこころの変化等についてご報告させて頂きます。

香蘭女学校中等科では、SE学習（中学2年生は通年で週1回の授業）という特別授業を開講しております。これは、総合的な学習の一環として様々なプログラムの中から、自分で興味のある科目を選択し、自己啓発を高めていく授業です。私が担当する中学2年生のSE学習では「世界がもし100人の村だったら…」というタイトルで、世界で起こっている戦争や飢餓などの諸問題を知り、自分の頭で考え、自分の言葉で発信していく事を目的とし、計20人の生徒達が集いました。生徒達の思いに沿える様なプログラムにしようと、私自身ゼロから学ばせて頂く気持ちでスタート致しました。

One Minute Videoコンテストを知ったきっかけは、ユニセフのホームページでした。我が校の卒業生である黒柳徹子さんがユニセフ親善大使として活躍されている事から、生徒達には世界の同じ世代の子供達に目を向け、黒柳徹子さんの様な女性のこころを育ててほしいと願い、ユニセフに関する情報を集めていた頃でした。One Minute Videoコンテストは、本授業の目的に合致した絶好のプログラムであり、且つ、生徒が社会と繋がる事の出来る機会でもあると感じ、コンテストに応募する事を決めました。ただ、これまで私自身映像制作をした経験はなく、機器を扱う事もままならない状態でしたので、ユニセフのワークショップを見学させて頂き、そこで講師を務める東海大学文学部広報メディア学科の五嶋正治先生をはじめ、学生ボランティアである東海大学の学生の皆様に生徒への指導の手順や方法をご指導頂きました。なかでもワークショップに参加していた他校の生徒の皆さん、真剣に作品に向かう姿勢と思考力には大変感銘を受けました。

## 絵コンテ制作

授業では1班5人ずつ、計4班に分かれ、制作を始めました。そこで痛感したのは、私を含め、これまでいかにこのような国際的な問題に触れずにきてしまったか、「平和」について真剣に考える機会がなかったかという事です。生徒達は「平和とはなんだろう」と頭を抱えながら話し合っていましたが、限られた知識量の中で思い描けるのはハートや花のイメージくらいで、それらを形にしても相手に全く伝わらない状態でした。それは大人として、また教員としての責任を思うと、一種のドキリとするような危機感を覚えましたが、ゼロからじっくり調べさせる時間は取れなかった為、なるべく生徒が班で話し合った絵コンテを尊重し、それに合わせてどのような諸問題があり、どのような援助が



©香蘭女学校



毎々としながらも顔をつき合わせて話し合う事の大切さに触れ、本音を言える環境作りと、その中で建設的な議論をしていく術を学んだようです。また、班ごとに中間発表として絵コンテプレゼンテーションを行いました。生徒達は互いに鋭い指摘をし合い、自ら気付きを得ていました。教員に言われるよりも、よっぽど生徒達の心には響くようです。

## 撮影



初めて触れる機材、初めて行う撮影。要領の良い生徒もいれば、ひとつひとつ丁寧に指導しないと立ち往生してしまう生徒もいました。そこでまず多様な角度から発想を広げる訓練として、誰か一人のポーズに自分のポーズをつけ加えてストーリーを作るアイスブレーキングを行いました。すると、生徒達は撮影の時に真上から撮ったり、覗き込んでみたりと、どのアングルから取ると伝わりやすいのか、自分達で試行錯誤出来る様になりました。次に、1分間でまとめる作業については、1分の短さを体験してもらう為、テレビのCMを見せ、どのように起承転結をつけて印象に残る映像を作成しているか、その感覚を掴むトレーニングを行いました。すると生徒達は10個学んだ事をそのまま10個映像に盛り込むのではなく、不要な情報を省いていく勇気を持つ事を学んでいきました。撮影が始まったら、どんなに拙くても、教員は生徒達の作品に必要以上に手を出さない事、一方で映像機器などは惜しみなく提供し、生徒の作品作りに制約がないように配慮する事を私自身学ばせて頂きました。

編集の時間を話し合いに当てた為、ビデオの仕上げは教員である私が担当致しました。生徒には、撮影ごとにシーンのカットを挟みこませ、どの映像を使うのか、どのような音楽やコメントを挿入するのか、一班ずつ要望を聞きながら相談し、出来るだけ生徒のイメージに忠実な作品になるよう努めました。

## 上映会とその後の生徒のこころの変化

制作開始から2ヶ月弱で作成したビデオ作品は、夏休み前に上映会を行いました。決して完成度が高いものになったとはいえないが、生徒達の意識は明らかに変わったように思いました。例えば、平和=ハートという考え方しか脳裏に浮かばなかった生徒達が、小さな行動が大きな行動に繋がる、そのこころ（ハート）を持つ事こそが、平和をつくっていく一つの力になると気付き、ペットボトルのキャップを集め、それをワクチンの注射針に変える作品を制作しました。上映会でその作品を見た別の班は、「これまで私達に出来る事は募金しか思い浮かばなかったけれど、ペットボトルのキャップという身近なものから支援出来ることがあ

なされているか、班ごとに指導していく中で、共に考える時間を重視しました。まずは「相手の痛みをこの身に引き受けて感じること」、そのうえで「自分にできることはいか考えること」の2つを軸に、当初の撮影予定を延長し、メンバーとの話し合いの時間を長く設定しました。生徒達は意見の対立を恐れるのでもなく、また同調して話を流すのでもなく、

る事が分かった」とコメントしていました。私はこの時、東海大学の五嶋正治先生のお話を思い出しました。五嶋先生は「以前、ゴミ問題を訴える作品を作った生徒は、その後レストランで自分が食べられるだけのご飯を注文する事が出来るようになりました。『半ライスでいいです』と言える勇気を持てたのです。そのように、ビデオ制作を通して実生活が変わっていくことが大切です」と仰いました。ペットボトルのキャップは400個集めて、やっと10円になります。金銭的に見れば、とても効率の悪い事でしょう。それよりも直接10円寄付した方が遥かに楽で、効率も良いはずです。しかし、10円募金をして1回世界の子供達に思いを馳せるより、400個ペットボトルのキャップを集めて、400回病気に苦しむ世界の子供達を思い出す、そのこころをじっくり育していく事が大切なだと実感したのです。生徒のこころの鐘を鳴らし続ける事こそ、教員として、今の私がするべき務めであると実感致しました。

その後、入賞作品を鑑賞し、自身の作品の振り返りをさせた時の感想を抜粋致します。

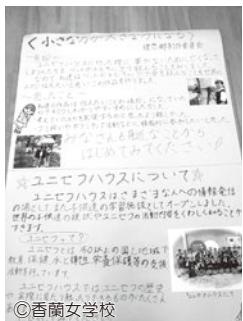
「どの入賞作品も皆自分の身近な事に置き換えてストーリーを作っていたので、心によく伝わってきた。一方で、自分達で作った作品は客観的だったと思った。伝えたいことが遠回しで、内容も薄かったように思う。もう一度見たとき、他人事だったかなと思った。また、思っていたより考えていたことが現実的には実現が難しかった。」

「この前、母とスーパーに行った。母はレシートを見て、『なんだ、100円か』というような事をつぶやいていた。私はユニセフハウスに行った時、100円でいろいろな支援が出来ることを教えてもらい、その時の話を思い出したので、母に『たった100円でも大切なんだよ！』と熱く語った。あまり反応が無かったが、まずは自分がいろいろな事実を知ってそれを伝える事が大切なのだと感じた。」

「フェアトレードについて興味を持ち、夏休み中、授業で紹介されたフェアトレードの店へ家族と行ってみた。意外にも、可愛い作品がたくさん売られていて、欲しいなと思った。だから私はいつか働いて自分のお金で買えるようになったら、買いに行きたいと思う。」

「またビデオを皆で作りたい。でも映像制作だけで終わらせずに、これから生活していく中でも、積極的に募金活動やボランティアに参加したい。」

## 映像制作後の活動について



生徒達から映像制作をリベンジしたいとの声が上がったので、3学期末のSE学習発表会で同学年の生徒に見せる映像を作る事にしました。まず我が校の文化祭では、今回の映像制作の意図と内容、制作の反省を書いた展示と上映を行いました。次に10月の世界食料デーにちなんで「世界の食料問題と飢餓」をテーマに調べ学習を行ったり、調理実習でウガンダの給食を作る事によって、1回目の映像制作の時より、知識も考え方も深まりました。その例として、ある生徒の声を紹介します。「アフリカの子供達の、皮のような細い腕を見て、とてもショックだった。私は、今調べているアフリカの飢餓の状態や日本からの支援の在り方を伝えたいが、最後は『支援』という綺麗なかたちで終わらせたくない。支援はしていても、なかなか変わらない現状がそこに在ること、子供達のこころの叫びを伝えたい」私はそのような声を聞いた時、1学期の映像制作の時より、生徒達のこころに新たな芽が育ってきている事を実感致しました。話し合いも撮影も、互いの信頼関係が構築された上で、前回の反省をふまえて行っていた為、完成した2回目の映像は、なにより本人達が大変満足のいく内容に仕上がったようです。生徒一人一人の感性に響き、他者の立場に立って考えられるこころが育った時、今度はその生徒達が次の生徒達へ、そ

のこころの種を蒔いてくれる事を心から願っております。

一步ずつ小さな変化を遂げていく生徒達。普段生徒達になかなか「失敗」をさせるゆとりがない中で、敢えて生徒達には失敗をさせる、そこから生徒達は自ら学んでいく事を、私自身学ばせて頂きました。それにはどれだけ教員が待てるかというのは、これから教育を考えいくうえでとても大切な事の一つであると考えます。教員として、どこまで生徒にやらせるかというのは、とても見極めが難しく、状況に応じてどのような言葉をかけ、どのように働きかけるのか、それこそが教員としての質が問われると感じました。教員2年目の私は未熟なところも多々ございましたが、時に見守り、時に手を差し伸べながら、生徒と共に成長していく喜びに触れました。教員の面倒見の良さが生徒の成長を阻んでしまわぬよう、生徒達が知的好奇心や意欲を以て行動に移す、その入口に立てるまで、自分には何が出来るのか、考え続ける「教師」となる様、研鑽してまいりたいと思います。

最後になりますが、この度お世話になりました、日本ユニセフ協会の職員の方々、東海大学の五嶋正治先生と学生の皆様、その他ご協力頂きました全ての方々に、厚く御礼申し上げます。

**< 2013 One Minute Video 制作スケジュール 5/10 ~ 6/28 授業時間 週1回 (13:20 ~ 14:50) >**

日程	制作過程	内容	課題・ふりかえり・注意点などのメモ
5月 10日	情報収集	ユニセフハウスで取材 展示をみたり、お話を聞いて イメージをふくらませる	生徒にはメモをとらせるように指示 ユニセフに提出する感想で、各自フィードバックさせる
5月 17日	絵コンテ作成	各班に分かれて、絵コンテ作成 5時間目：各自で絵コンテ作成 6時間目：各班で共有し、どの絵コンテにするか決める。絵コンテプレゼンテーションの準備をする。	図書室で作業。生徒達は話しあいを進める。絵コンテは時間内に書き上げられず、次の6時間目にもちこした。
5月 31日	絵コンテ プレゼンテーション	各班ごとに絵コンテプレゼンテーション（中間発表）。他の班からコメントやアドバイスをもらい、もう一度計画を練る。役割分担を決めて撮影へ	平和についてのイメージが弱く、漠然とした内容が多かった。次の授業までに各班ごとにアドバイスシートを配り、読んできてもらうように指示。それをふまえて7日にのぞませる。
6月 7日	撮影	各班で校内の目的に合った場所に行き、学校の三脚とビデオカメラで撮影	5時間目はもういちど話し合いをさせる。どのような流れで進めるか班をまわり、OKが出た班から撮影許可を出す予定だったが、この段階で撮影に入れるところはなかった。
6月 14日	撮影 編集	撮影	1班は絵本作り。2班撮影開始（しかし、何度も手間取り、あまり進まない）3班は写真選びと粘土作りに苦労し、4班は構成が見えないまま作業
6月 21日	編集	撮影のつづき 1分間のCMを見せてイメージ作り	4班撮影開始（授業外にも作業）1、3班は絵や工作に必死で作業に入れず。
6月 28日	最終発表	各班の発表会＆感想などを共有するつもりができず、撮影のつづき	撮影の素材を集めることで終わってしまった（4班のみ素材が揃わない）編集を7/9までを行い、7/9のテスト後に発表会

進捗状況	
1班	<p>テーマはしっかりと分かりやすく、募金をするということで決まっていた。しかし、募金をしているストーリー作り（絵本の構成）につまずき、さらに絵本を実際に絵の具で作るのに時間がかかっていた。しかし、撮影は1日で終わり、撮影の方法も自分達で行えていた。</p> <p>内容：募金をするだけでなく、それを次の人へ絵本を渡すことであなげていくというところまで落とし始めたのは大変良い。</p> <p>課題：伝えて、その先にどうなったかを見たかった。</p>
2班	<p>最初は漠然としたテーマから始まった。息をふきかけて♡をとばす、それを受けとった人々がいて世界が平和になるといったもの。</p> <p>その♡をより具体的にさせるとこから始まり、エコキャップを使って注射針に変えるということを自分達で修正した。撮影入るのは早かつたが、なかなか上手く進まなかった。どのようなアングルで、どのようなモチーフを使って効果的に撮影するかをもっと考えると良かったが、見せ方のアイデアは自分達でよく工夫し、また編集作業を丁寧に守ってやっていた。</p> <p>内容：10円寄付して1回思い出すより、400個キャップを集めて400回顔を思い出すのが大切と学んでいた。自分達でキャップを集めて活動していくことが良い。</p> <p>課題：自分達の実現したいことが、どのように映像で一瞬で伝わるかを工夫する必要があった。</p>
3班	<p>最初は、花が回転して妖精が出てくるなど、かなり抽象的な話になっていた。話がまとまらないまま粘土で素材を作り始めていたが「素敵な世界」を実現したいという漠然としたイメージからなかなか抜けきらなかった。内容よりもストーリー展開に意識がいきがちだった。しかし、最後には花に色をつけていくというアイデアをもってきて、その花を子供に見立てて戦地の子供を救うという事にしたのは良かった。</p> <p>内容：花が何を意味するのか、それが最後で子供だったのだなという事がなんとなく分かるようになった。爆撃など表現が難しいものを見せ方のアイデアを練って、仕上げの段階でとくに力を入れていた。</p> <p>課題：やはりまだテーマが曖昧。作る側が曖昧だと見ている方も伝わりにくい。</p>
4班	<p>絵コンテを作成するのが最も遅く、絵コンテが完成しないまま作業に入った。映像でみせるというイメージがなっておらず、豊かな国と貧しい国を両方うつしたいなどの意見もあり、映像でどうみせるかが課題だった。しかし授業外に撮影をしたり、その意欲はとても感じられ、漠然としているものをどうやって映像にしていくか自分達なりによく考えて提案していた。</p> <p>内容：種をあけることで、それが発展していく。映像にするのはとても難しいテーマだったが、時間の継続を表す種としたところが良い。</p> <p>課題：工作に必死になってしまい、全体で話しあう時間があまりとれていなかったように思うので、絵コンテ作りでもうすこし共有すべき。</p>